

※各見出しのハイパーリンク、QRコードから記事全文がご覧いただけます。



『楽只堂年録 9』史料募集古記録編

【書き手】宮川葉子

## 『楽只堂年録』完結をめぐって一柳沢吉保の真姿に迫る

『楽只堂年録』は、徳川5代将軍綱吉の側用人として大老格に到った柳沢吉保の公用日記。時代劇では「名悪役」として描かれることの多い吉保はいかなる政治家だったか、その実態に迫る。



『連歌卷子本集 2』新天理図書館善本叢書 32

【書き手】尾崎千佳

## 言霊のドラマー秀吉はなぜ連歌師紹巴を寵遇したのか？

明智光秀・細川幽斎等の戦国武将と親交を結び、天下人秀吉に接近した連歌師紹巴（じょうは）。秀吉政権下、公武・都鄙の有力者たちがこぞって紹巴の連歌に惹きつけられたのはなぜか。



『日本古代の文書行政 — 正倉院文書の形成と復原』

【書き手】矢越葉子

## 正倉院文書のハンコ

「ハンコ文化」と称されるほど印が広く一般に利用されるようになったのは江戸時代以降とされる。それでは、それ以前の社会ではどうであったのか。



『芭蕉集 自筆本・鯉屋物』新天理図書館善本叢書 34

【書き手】大橋正叔

## 芭蕉自筆の名品コレクション！「鯉屋物」とは何か？

芭蕉の高弟で後援者でもあった杉山杉風の家々に代々伝わった芭蕉関連資料は、杉山家の屋号から「鯉屋物」と称される。その全貌を伝えるオールカラー版の解題を抜粋公開。



『花月日記 1』史料募集古記録編

【書き手】岡蔦偉久子

## 「寛政の改革」を断行した松平定信の晩年の日記

「寛政の改革」後、引退して白河藩下屋敷に隠棲して以降、17年間の長期にわたる詳細な記録。数多くの和歌とともに家族や親族、友人たちが登場し、人物評伝などが散りばめられている。



『日本書紀の誕生 — 編纂と受容の歴史』

【書き手】河内春人

## 古代から現代まで、1300年読み継がれた正史

日本最初の正史として『日本書紀』は書き写され、伝えられ、そして多くの人に読まれてきた。現在も燦然と輝くこの正史はいかにつくり、読み継がれたのか。その歴史をたどる。



『梁塵秘抄詳解 神分編』

【書き手】永池健二

## 現代に甦った平安の王朝びとの心の歌声とは？

後白河法皇が自らまとめた『梁塵秘抄』。その「神分」編に収められる今様神歌35首。跳梁する神々を崇め敬い、恐れ忌避した王朝びとの心の歌声について、書き下ろしで解説。



『氏経卿神事記』史料募集古記録編

【書き手】比企貴之

## 伊勢神宮の中世史料をめぐる状況

15世紀前半から末期にかけての伊勢神宮（内宮）の禰宜のひとり、荒木田（藤波）氏経が記した古記録。年中諸祭儀を執り行う日々の様子、殿舎の状況や宮域の様子など内宮の歴史的景観等々。



『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵 日葡辞書』

【書き手】白井純

## 希少なキリシタン版の辞書

400年前の戦国時代の日本語を知る最重要資料『日葡辞書』。2018年、中南米大陸ブラジルで初めて発見された日本のキリシタン版辞書を、高精細・原寸カラー版で初公開。



『中世天皇家の作法と律令制の残像』

【書き手】久水俊和

## 臭い漂う中世の内野と古池、この荒れ果てた地域には一体何があったのだろうか

およそ600年前の室町時代、京都。その「常識」を覆し、荒廃する大内裏の官庁街であっても、国家的機能を十分に果たしていたことを明らかに。著者自らの書き下ろしで解説。